

# 第4回 社会運動と社会教育

担当：奥村旅人

# 講座の趣旨

- 社会運動の歴史的展開を、社会教育の実践に即して概観する。
- 社会運動にも携わっていた知識人たちは同時代の学校教育システムをどう捉え、何を問題とし、どのようなオルタナティブを創ろうとしたのか。
- そうして創られた場所に通った労働者たちは、その場所にどのような意味を見出したのか。
- 普段あまり顧みられることのない、「学ぶ」ということの意味と可能性を改めて考え直してみたい。

# 講座の流れ

- 第1回：当たり前前に用いられている「教育」という事象について、一度立ち止まって深く考えてみたい。
- 第2回：戦前期の関西における労働運動の流れの中で誕生した「大阪労働学校」の実践を掘り下げてみる。
- 第3回：戦後期に京都に誕生した「京都人文学園」について検討する。
- **第4回：ここまでの議論をまとめて、改めて学ぶとは、知とは何かを考えてみる。**

# 今回のテーマ

- 今回のテーマ  
…学ぶこと・〈知〉の意味再考
- 二つの補助線：①労働学校の教育目的・内容が戦後にたどった変遷、②労働学校という教育空間が、教育者と学習者それぞれから与えられた意味と教育のモード

# 労働と（社会）教育

区分	研究の関心・方向性	主な先行研究
労働教育 <sup>1</sup>	①「労働」・「労働者」に関することを学ぶということについての研究	藤岡貞彦に代表されるような、「労働・職業を、階級的な支配・被支配の及ぶ場として捉える、生産関係を重視した研究方法」 (末本誠)
労働者教育	②「労働」の能力(職業能力)を向上させるために学ぶということに関する研究	・本田由紀／田中萬年…日本の「教育」が「職業」を軽視してきたことを指摘 <sup>2</sup> 。 ・児美川孝一郎…戦後教育の状況：「労働」への饒舌、「職業」への寡黙 <sup>3</sup>
	③「労働」しながら学ぶということに関する研究	
労働の教育的意味	④「労働」から学ぶということに関する研究	倉内史郎氏に代表されるような、労働・職業に関わる教育活動を実証的に踏まえながら、いわば労働過程に教育的な意味を見いだそうとする研究方法 (末本誠)

# 働きながら、教育者によって学ぶとは

I 企業内教育	OJT、Off-JT	
	企業内学校	
II 職場の外の教育機関	(i) 学校教育（夜間中学校／定時制高校／通信制大学）	
	(ii) 社会教育	「労働学校」や民間の資格のための教育機関など、「教育」を目的とした機関
		職業訓練機関やNPOが開く相談会、労働基準相談所が開く相談会など、教育機関としては設立されていないが、教育機能を有した機会

この講座は社会教育の機会に特に着目しているので、「労働学校」を詳しく検討する。

# 「労働者」の教育機会（再掲）

- 「労働学校」…①働く青年や「労働者」を主な対象とした、②正規の学校外で開かれた、③また職場からも独立して開かれた、④「学校型」の教育機関の総称。
- 1920年代にはじめて創られ、現在でも存在している。  
注視すべき点は、1920年代には行政や労働組合など様々な政治的背景を持つ機関・団体によって創られたということ。
- 現在では、一部の労働組合によって運営されているか、行政と労働団体、知識人の合同によって運営されている。

# 労働学校の二つの“文脈”

- **“社会運動の文脈”**：労働運動の担い手の養成や、それに対抗する労使協調主義的な教化運動などの要請から創立された。
- **“教育の文脈”**：労働学校は主に大学という教育機関に在籍した経験を持つ知識人たちによって運営されたために、労働学校は、同時代の学校教育体制に対する批判的思考、学校教育の対象拡大、あるいは高等教育機関で主に生産・伝授される「学問」の担い手の創造などを目指す教育機関でもあった。



- 大阪労働学校（1922-1937）など戦前期関西地域の労働学校  
賀川豊彦の創立宣言

〔一〕我等は有産階級の独占から教育を解放すべき事を要求する、夫れが有産階級の独占に歸してゐる間学問は遂に去勢された馬の如くであらう。

〔二〕教育されるものは、常に心の世界に住む。それは教へるものと、教へられるものゝ二つの群に分かたれるが、それは階級であつてはならぬ筈である。〔…〕学校はたゞ金持ちだけが、金をもつて行くべき筈のものではない。それは、金の多少によつて大中小学の區別をつけるべきものではない。それは個性の才能によつて大学教育まで受けられ得べきものであらねばならぬ。〔…〕労働学校は、此処に生まれ出づる必要があるのである。

〔…〕教育による改造運動は暴力による改造運動と、その本然に於て性質が違つて居ることに、気がつかねばならぬ。教育改造は急いではならぬ。

- **「大学教育」を受ける基準が「金の多少」で決まっているという学校教育システムへの批判（“教育の文脈”）を念頭に置きながら、労働学校の目的を「改造運動」の「運動員」養成に置く（“社会運動の文脈”）。**

- 京都人文学園（特に昼間部：1946-50）

### 新村猛の創立趣旨書

[...] 従来の学校教育は立身出世の具に供せられ勝ちとなり、延いては観察と推理との力の涵養はおろそかにせられ、暗記力がおのづと重視せられる結果を招き、学校に於ける教科目も徒に細分される傾きがありましたが、私たちは右のやうな弊風を打破し、早くから学問をあまたの分野に区切ることなく、基本的な諸学科について、その対象と成立と発達の跡とを懇ろに説き、またその研究方法を教えつゝ、自主的な思考人、しかも単に思考に秀でた知識人ではなくて、「行動の人として思考し思考の人として行動する」やうな近代人を養成したいと意図するもので [...] 私たちの学校は教育すると云ふよりもむしろ学び究めようとする後進を先進が掖導することに本旨が存し [...]

- **戦後、合法運動となった労働組合運動との関係を保ちながらも（“社会運動の文脈”）、戦前期の学校教育システムへの批判的思考を基盤とした学校のオルタナティブを創ろうとした（“教育の文脈”）。**

- 京都人文学園（夜間部：1950-1957）
  - ・ 1950年度の講義には「世界労働運動史」、1951年の講義には「労働運動」が設置される。
  - ・ 新村猛や久野収など、「文化運動」の担い手たちが離脱
- 政治運動・労働運動の担い手の養成という目的に最接近（“社会運動の文脈”）

- 京都労働学校（1957-現在）→【別紙】へ
  - ・ 初期（1957~1968）：京都人文学園夜間部からの傾向を引き継ぎながら、“社会運動の文脈”に傾倒。
  - ・ 高度成長期およびバブル期の終焉と重なる模索期（1968~1996）を経て、現在（1997~）には、教育内容が「**実務**」や「**趣味**」との関係を強めていく。
- これまでの労働学校に特徴的であった、同時代の学校教育に対する批判的なオルタナティブ（“**教育の文脈**”）にも、政治運動や労働運動、あるいは市民運動の担い手の養成（“**社会運動の文脈**”）にも回収できない、労働や余暇を即時的に充実させようとする講座が提供されるという、新しい事態が。

# 京都労働学校の戦後史

- ①「全体」の重視から「個」の重視へ、②「労働者」概念の変容…「組合員」から「市民」へ、③「学問」から職業能力涵養へ。
  - この意味は何か？
    - 「夢」＝国家や労働者階級といった「全体」が自分を幸せにしてくれるという考えが、「理想」から「虚構」へ、そして「不可能性」へと変わる過程？
    - それに応じて、深く、広い視点を提供しつつも実生活に即時的には役立たない「学問」が、明日使える知識にとってかわられる過程？

# 労働学校に見る〈知〉の現在

- かつて一大阪労働学校にはじまって、京都労働学校の初期くらいまでは一良くも悪くも、**明確な「理想」**が持たれていた。  
…歴史学を例にとると、マルクス主義歴史学・唯物史観や近代化論的史観など、ある意味「社会はこうなるべき」というビジョンが明確な学問知  
→労働学校の教育内容は、どういう風に学ぶべきか、生きるべきか、を教えるものであったし、学ぶ側も、それへの反発を含めて、生のあり方を方向付ける機会となっていた。

# 労働学校に見る〈知〉の現在

- 京都労働学校では、1968年くらいから「**理想**」が揺らぐ。  
社会的背景としては、社会運動が一つの転換を迎える時期であり、学的な風潮としては、「ポストモダン」と呼ばれる流れの中で、「理想」は相対化されていった。  
→**すべての〈知〉は、言説によって作られた「虚構」である**という態度の一般化。
- ポストモダンが持つ「虚構」化の説得力のなかで、我々は**次の「理想」を見出せない**でいる。  
→京都労働学校の科目は、「実務」や「趣味」という極めて短いタイムスパンで学習者の生を充実させるものが主流に。

# 労働学校に見る〈知〉の現在

- 社会教育学と呼ばれる領域で何となく共有されていること  
…学べばなんでもいいというわけではない。
- コロナ禍で次の「理想」がもう一度求められる今、**次の「理想」は何か**。（個人的には、私的所有の（部分的）放棄の可能性を追求してみたいと思うが…）
- 抽象的な学問知と、学習者の生活に基づいた〈ローカルな知〉の往還によって、「理想」に関する〈知〉を鍛える。  
このような学びの場所を、我々はいかに創ることができるだろうか。